

研修旅行の作り方 <その4>

陸稲コースの研修旅行の事例

今回は、2006年から2012年まで当社が受託したJICA 筑波「サブ・サハラアフリカ地域陸稲品種選定技術コース」における研修旅行計画の実例について紹介する。本コースは、当時、7月中旬に研修員が来日し、11月初めに帰国する3か月程度の研修期間であり、実習中心の研修カリキュラムを組み立てると、研修全体に対する見学の割合は、10%弱と前回紹介した「野菜コース」の15%と比較しても低い割合であった。本コースの見学先は、日本の陸稲栽培の7割が茨城県に集中していることもあり、多くは茨城県内の見学先への日帰り見学であったが、種子生産技術については、水稻種子の受託生産量日本一の富山県の実情を学ぶための宿泊を伴う研修旅行を実施した。比較的短い研修期間であるため、旅行期間は2泊3日とした。実施時期は研修序盤の8月初旬と収穫、レポート作成で多忙になる9月以降を避けると8月の中下旬に限られた。その時期は、イネの出穂から登熟の期間に当たり、日本全国どの地域でも見学に適した時期ではあるが、お盆の時期と重なるため、日程調整に配慮が必要であった。

見学先の選定について、富山県の種子生産の現状を理解するために、表1のような見学先を考えた。

表1. 本研修旅行の見学先候補

| | 研修内容 | 見学先 |
|---|--------------------------|--------------------------|
| ① | 原原種生産と原種生産 | 富山県農業研究所 |
| ② | 圃場審査を中心とした種子生産における普及員の役割 | 採種種子生産地（種場）を管轄する農林振興センター |
| ③ | 採種種子生産技術 | 採種種子生産地（種場）農協 |

原原種→原種→採種という種子生産の流れに沿った見学順序を考え、①を1日目に、②と③を2日目に実施することとした。幸い②と③の見学先は近接しているため、同日に実施することが可能であった。②と③の見学順序については、午前中に現場である③を見学し、午後に座学中心となる②の見学とした。

上記の見学先で、研修旅行の主要課題はカバーできているので、3日目は付加的研修項目について、近隣にある見学先を探した。何度か変更はあったものの基本的に3日目には富山から京都に移動し、当時、畑水稻の圃場試験を実施していた京都大学農学部の附属農場とアフリカ農業の研究実績のある京大アジア・アフリカ研究科の見学を実施することとし

た。本研修旅行の主題からは外れるが、「陸稲」と「アフリカ」の2つのキーワードにかかわる研究現場を知ることができ、研修全体の中でもユニークな見学先を加えることができた。これにより、日程は表2のようになった。

表2. 本研修旅行の旅程

| | 午前 | 午後 |
|-----|--------------------------|-------------------------------------|
| 1日目 | 往路移動（牛久—上野—越後湯沢—富山） | 農業研究所（富山県内） 富山市泊 |
| 2日目 | 種場農協（富山県内） | 種場 農林振興センター （富山県内）金沢市泊 |
| 3日目 | 移動（金沢—京都） 京都大学農学部附属農場 | 京都大学アジア・アフリカ地域研究科 復路移動（京都—東京—牛久） |

次に、見学先との調整となるが、ここに挙げた富山県の種子生産にかかわる機関は、他のJICA研修でも、見学先として取り上げることの多い機関であるため、過剰な負担となっていないか配慮が必要であった。また、研修旅行は日帰りの見学とは異なり、ひとつの旅程で複数の見学先を訪問するため、日程の調整がつかない場合は、ひとつの見学先をあきらめなければならないこともある。本コースでも見学先の都合がつかず代替の見学先に振り替えたことがあった。この時は、地元の状況に詳しい、別の見学先の方から情報を得て、見学先を調整した。

10名程度の海外からの研修員の団体旅行なので、鉄道の時刻など細かい旅程は、食事やトイレのタイミングなども考慮して、検討する必要がある。この研修旅行の場合、第1日目は、上野9:02発、富山12:49着であったので、車内で昼食を済ませるよう考えた。乗り換え地で駅弁などを購入することも可能なのだが、10分の乗り換え時間で、研修員が昼食を調達するのは困難と判断し、上野駅で昼食を調達する時間を確保できるように、旅程を調整した。効率的な研修旅行の実施には、こうした微妙的な調整が欠かせないことを強く感じている。

本コースは2006年から新たに始まった研修コースであったため、研修旅行に限らず、新規の見学先が多く、見学先との調整は試行錯誤が多かった。それでも年を経るごとに見学先の理解が得られることと、我々が見学先の実情を理解することで、次第に調整がスムーズに進められるようになった。